うさぎのチョコ

今年の夏、うさぎのチョコがなくなりました。

チョコは、学校のしいく小屋でかわれていました。体の毛が真っ黒で、くるくるした目がかわいく、チョコと名づけられました。学校では、毎年九月に四年生から三年生へとうさぎの世話をバトンタッチしています。四年生は、もう少しでバトンタッチなので、今まで以上にはりきって世話をしていました。

朝、登校するとすぐに小屋をのぞきに行ったり、昼休みには当番でなくても見に行ったりして、元気に育っているのを見守っていました。

七月のはじめ、チョコのおしりのあたりがかぶれてきました。そこで、たんとうの先生が病院へ連れて行きました。ところが、じゅう医さんのしんさつによるとチョコのおなかに赤ちゃんがいることが分かりました。

この話を聞いた四年生は、大喜びでした。今まで一年近く世話をしてきましたが、こんなことは、初めてのことでした。

「赤ちゃんが生まれるから、やわらかいわらをしいてやろう。」

「チョコには、えさをたくさんやろう。」

と、生まれてくるのを楽しみに世話をしていました。

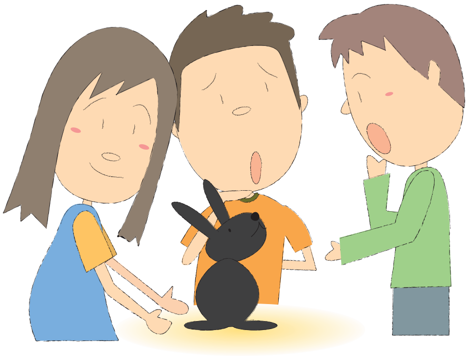
ところが、予定日をすぎてもなかなか生まれません。たんとうの先生は、もう一度病院へ連れて行き、じゅう医さんにみてもらいました。そこで分かったことは、『赤ちゃんは、すでにおなかの中で死んでいること。そのため、チョコの体は、かなり弱っていること。でも、チョコのいのちを考えると手じゅつをしなければ助からないこと。うさぎは、とてもデリケートなので手じゅつ中に死んでしまうことがあるかもしれない』ということでした。たんとうの先生は、学校へ帰って相談することにしました。

校長先生を中心として、先生方が相談しました。

「子どもたちがあんなに世話をしているのだから、なんとかして助けてやりたいなあ。」

「このままでは、チョコまでが死んでしまう。手じゅつをしても・・・。こまったなあ。」

「チョコのいのちが助かるかもしれない。手じゅつをう



けさせよう。」
校長先生の言葉で、手じゅつを受けることが決まりました。
この話を聞いた四年生は、
「チョコ、がんばれよ。」
「チョコ、元気になってね。」
と声をかけてはげましました。

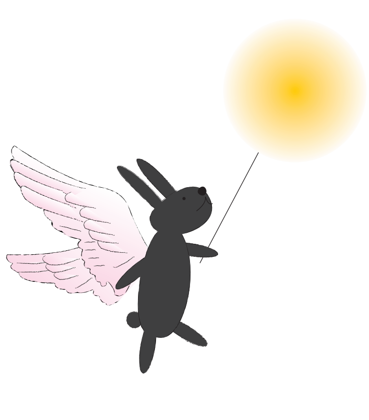
よく日の朝。チョコは、入院して手じゅつをうけました。手じゅつはうまくいき、その後のけいかもじゅんちょうという連らくが入り、先生方もほっとしました。

ところが、その日の午後七時、病院から学校に電話がかかってきました。三十分ほど前に、体の調子が急にわるくなり、今、心ぞうマッサージをしているというものでした。

たんとうの先生は、急いで病院へ向かいました。

そこには点てきのくだがつながれ、じゅう医の

先生方のけんめいのちりょうを受けているチョコがいました。チョコのために三人のじゅう医さんが一時間もの間、交代で心ぞうマッサージをしてくれていました。チョコは、ぐったりとしています。たんとうの先生は、（チョコ、がんばれ。助かってくれ。みんながまってるぞ。）いのるような気持ちで見守りました。先生の頭に、一生けん命にチョコをはげましていた四年生のすがたが目にうかんできました。じゅう医さんは、チョコのむねのあたりを休みなく、おしてくれていました。しばらくしてじゅう医さんは、ちょうしんきをチョコのむねに当てました。そして、頭を横にふってチョコのいのちの終わりを知らせました。

じゅう医さんの話を聞くと、死んだ赤ちゃんがいたおなかのじょうたいから考えると、ここまで生きたのは、きせきに近く、チョコなりにがんばって生きたということでした。

でも、もう二度とチョコは、もどってきません。